



第47回全道造形教育研究大会

根室大会特集

今こそ郷土根室を、豊かな感性で掘り起こそう！

根室大会テーマ

「感性から発し、躍動する力を育くむ、造形学習を！」



北海道
造形教育
連盟報

No.105 1997.12.15 発行

発行 北海道造形教育連盟

事務局 〒006 札幌市手稲区前田2条12丁目1-2

札幌市立手稲鉄北小学校 芝木秀昭

☎011-681-2287 FAX011-681-7394

第47回全道造形教育研究大会・根室大会を終えて

「最果て根室の、泥臭い感性で綴る大会エピローグ」

第47回全道造形教育研究大会・根室大会

事務局長 山口 長 伸

第47回全道教育研究大会・根室大会が、平成9年7月28日・29日の両日、根室市立花咲小学校と根室市総合文化会館を会場に、盛大に開催されました。

私達根室造形教育連盟の会員にとって、4半世紀間も待ち続けていた大会、根室の多くの先輩達が「根室で全道造形教育研究大会を！」と夢に見てきた大会が、47回にしてやっと実現できた喜びでいっぱいです。今は実行委員全員が、成功感、充実感、満足感、成就感、解放感に浸りきっているところです。

石の上 並ぶ昆布の 縞模様

香し季節 もはや終わりぬ

思い起こせば、今から3年前の平成6年夏、第44回釧路大会のレセプションの宴席で、口を滑らせたのがそもその発端でした。「そろそろ根室でも！」という後押しの声に押され、釧路の地酒「福司（ふくつかさ）」の酔いの勢いを借りて、「根室が引き受けます！」と、断言してしまったのです。

福司 呑んで気持ちが でかくなり

北の勝との 勝負引き受け

2次会では、酒豪であり、根室の美術教育の実践家を自惚れる数名が、釧路の地酒「福司」と根室の地酒「北の勝」を語呂合わせして、戯歌を詠んだものです。

釧路との 勝負に挑む ふつ(く)つかさ

北の勝にて 根室の勝ちなり

さて、張り切って引き受けてはみたものの、実はたいへんなことを引き受けてしまっていたのでした。

まず、根室造形教育連盟会員の拡大から手をつけました。根室管内71校に呼びかけ、数名の精鋭を集めました。無理を言って、授業者を引き受けてもらいました。授業者の中には、初任者2名、校長2名もいて、絵画・版画・彫刻・デザイン・工芸の領域もそろえました。プレ研究会や実技講習会、冬の合宿研究会も開催し、盛り上がりを図りました。実技講習会では、全道造形教育連盟顧問の金井秀男先生を講師にお迎えし、大成功に開催できました。

基礎伝ふ 重鎮金井の 技の冴え

学ぶ我等は 心洗われ

昨年の夏には、研究部も授業者に対して積極的な支援を始め、根室大会のキャッチフレーズを作りました。「今こそ郷土根室を、豊かな感性で掘り起こそう！～親潮の海霧と暁が織り成す大ロマン、そんな最果ての風土を生かして感性を磨き合いましょう～」根室の雄大な自然にマッチしたこのキャッチコピーに、たくさんのお客さんが吸い寄せられるような期待をもって作りました。

また、研究部の討議の中で、地域に根差した泥くさい実践を、根室らしく、自然体で公開していくことを再確認したのです。教師が豊かな感性を持ち、個性の強さを前面に出して、普段着の、飾らない授業をすることが、根室大会の成功につながっていると確信したのです。

ひたむきに 描き励みし 根室の子

笑顔爽やか 感性育てむ

次に、提言者・司会者・助言者・記録者の運営委員の委嘱を行いました。根室だけでは員数不足のために、他管内の造形教育連盟にも、役員の選出を依頼しました。兄弟であり先輩格の釧路支部は、手のかかる弟・根室のために、心温まる援助をしてくれました。次年度開催の留萌支部も、「自分達のためになることだから……」と、大挙して支援の手を差し延べてくれました。造形連盟の仲間のありがたい励みでした。

ねむろうと する児にかかる みぞれ雪

釧路・留萌の 傘の温もり

資金の面では、根室管内1市4町と、根室教育局、全道造形教育連盟に多大なご支援をいただきました。参加費の負担を、できるだけ軽減するために、事務局もあらゆる手立てを講じました。開催要項は、全道約2,300校の小中学校へ、各教育局を経由し、全道212市町村教育委員会を通して、手渡しする方法もとっていただきました。官民一体のご協力のお陰で、苦しい財政を支えていただき、参加費軽減につなげることができました。

温かき よろずの力 当てにして

配りし要項 北へ南へ

こんな多くの協力をもって、第47回全道教育研究大会・根室大会が開催されました。全道各地から、優れた実践を抱えて、北海道の最東端・根室に来てくれるというのです。当初の予想では、「100人も来ればいいべき。」という低い予想と、「いやいや、300は越えるっしょ。」という高い見積りで、多少の混乱もありました。第1次の参加集約は、やっと100名を越え、「まあ、かっこついた。」と楽観的に考えていました。しかし最終集約では、230名を越え、嬉しい悲鳴に変わったのです。そして大会当日は、なんと飛び入り参加もあって、260名を越えてしまったのです。

造形の 熱き思ひを 語らむと

集ひし仲間 大輪花咲く



更に驚くことは、当日の人手不足を心配した根室管内校長会や教頭会の、運営ボランティアが続々と押し寄せて30名以上もいたため、大混乱になりました。弁当が不足してしまったのです。

ニムオロは 霧も深いが 情けも深い

弁当当たらず 恨みも深い

(筆者も大混乱の余り、高尚な？和歌が、低俗な都々逸になってしまいました。)

大会の火ぶたは切って落とされましたが、開会式からハプニングの連続でした。釧路・千歳・札幌大会で、開会式の運営の仕方をしっかり学んできたはずなのに、順序を間違えるは、来賓の送迎を忘れるは、協賛してくれた教材業者の意向を無視するは……。ああ……。

事務局！何やってんだ！叱責叱咤お小言お目玉の連続。

泡を吹き 真っ赤になって 横歩き

あわて床屋の 蟹のごとくに

それでも、公開授業が開始される頃にはやっと落ち着きを取り戻し、研究大会らしいぴりとした雰囲気が出

てきました。「根室らしさ」を出すことが、授業の共通点でしたので、授業者もそれぞれが工夫しました。

「根室の霧の世界のイメージ化」……………小3
「根室の酪農を題材にした共同版画」……………小5・6
「根室の漁業を映像化するCMづくり」……………小5
「根室の砂や貝殻を使った土器の制作」……………小5・6
「彫塑用粘土を大量使用する根室の動物づくり」……………小1
「根室の石に描く根室の自然のデザイン」……………中1
「根室の鮭の皮を使った工芸の制作」……………中3
「イラストレーション・根室のガイド・マップ」……………高2

授業の主題には、必ず「根室」の地域性を前面に出して、研究大会当日の授業は、地域に根差した泥くさい実践を、根室らしく、自然体で公開できました。

午後の分科会では、授業を参観して下さった遠来の皆様から、「あったかみを感じた。」「図工・美術の授業の原点を見た。」「僻地教育にもこんな良い実践があったのか。」といった、お褒めの言葉をいただきました。もちろん、批判、非難、揶揄、こきおろしもあったのですが、なぜか忘れませんでした。子ども達は褒められて伸びるのです。私達根室の教員も、褒められて伸びました。

褒められて 自信広げる 造形の

この昂まりを 子等へ伝える

その後、根室の名所へスケッチ旅行には30名、夜の親睦交流会には120名の参加がありました。スカーレット色の花咲蟹にしゃぶりつき、北の勝を吞んで、クリームソングレーキに変化していく幸せそうな顔・顔・顔。今までの苦労が吹き飛ぶ、気持ち良い酔いの宵でした。

翌日の体験学習「流木を使って」の講座も、作品をお土産にできることで好評でした。更に、粟野武夫先生の講演「根室の植物」は、スライドを使った中身の濃い内容で、もっと時間に余裕を持たせるべきでした。

親潮の海霧と暁が織り成す大ロマン、そんな最果ての風土を生かして感性を磨き合うために、全道各地から五里霧中でやって来た仲間達。「哀愁の街に霧が降る」ので、「霧笛が俺を呼んでいる」と思って、「夜霧のブルース」を口ずさみながら「霧にむせぶ夜」に「夜霧に消えたチャコ」を捜しに根室に来てみたら、見つかったので「夜霧よ今夜も有難う」なんて、全道各地に雲散霧消していった仲間達。本当にありがとうございました。

根室は、今、秋。今日は、真っ青な秋晴れです。

霧の向こうに

～根室大会に参加して～

札幌市立幌南小学校 安木 尚博

自分にとって根室のイメージは最東端の街としか無く、霧は釧路というものでしかありませんでした。前日に根室に入り、その夕暮れに山からどこからともなく沸き出た霧が、静かに流れ広がっていく光景を見て新鮮な驚きを感じました。

大会では、全ての授業を観て回る予定でいました。授業案綴りを開いてみると、1ページ目に3年生の授業に『霧の向こうに』という題材名、一瞬どきとしました。霧をどのように表現していくのか、造形活動として、どのように展開していくのか、また前日のこともあり強く興味をそそられました。そして、限られた時間の中の大部分を占めることになってしまいました。

霧についての子供たちの交流では、生き生きとした表情で見えたこと、感じたこと、体験したことなど様々なことが発表し合われ、霧が、本当に子供たちの身近なものとしてあることが伝わってきました。そんな霧の様子や感じをトレーシングペーパーを使ってという教師からの提案と実際に照明の光を通した実演から子供たちは、本時においての活動のねらいを理解し自分の表現に向かって、意欲的に取り組んでいました。折り紙やセロハンなどの材料も自分の必要感から選んだり、使ったりしながら、どの子供も夢中になって、手や感覚を動かしていました。そこには、自分の霧に対しての思いやイメージに何とか近づけようとしている真剣な子供の姿がありました。さらに活動が進むに連れて、子供たちの意識は光についても広がりを見せ、使い方まで考え始めました。霧という素材を通して光というもののまで、3年生らしさを発揮し、その美しさや不思議な感覚といったものを実感したのでしょう。暗い教室に優しい光に包まれた自分の作品が浮かび上がった時、発せられた子供たちの声には、満足感があふれていました。

中学3年生の「鮭の皮を使って」高校2年生の「根室のガイドマップ」など地域の特色を生かした根室ならではの校種を越えた図画工作・美術の授業も大変興味深いものでした。

駆け足で全ての授業会場を回りましたが、どこも子供、生徒を大切に教材化が図られ、授業の中心に子供たちがいました。研究の姿勢と熱意、柔軟な教材化など、多くのお土産をいただいた根室大会でした。ありがとうございました。



分科会点描（第4分科会から）

・校長が授業をやるということはすごい事だと思った。そういう学校経営をしているのは素晴らしい。

地域の土器をもとにして、粘土から作っていくことを教育課程に置づけ、1年生から6年生まで学校として野焼きに取り組むと、6年生までにかかなりの経験が出来る。いい環境の中で地域に根差した教育ができる。作業中に粘土が乾いてきてひびが入ったが、経験すると手を湿らすことによって解決できることもわかってくる。

・子供達が先人の土器を追体験するという案外子供の発想では古代人を小馬鹿にする、ということも、実際に土器を作ることと失敗したり、壊したりしながら奥の深さに気づくのではない。1～6年の流れの中でいろいろやってみる、砂を混ぜる、地域の粘土をもってきて作ってみるという所までに発展することが一つの感性を呼び起こすものではないか。



見て・ふれて・感じることの偉大さ

穂別町立仁和中学校 浅沼 宏子

才能とは、環境、興味、思考だと考えると、学校教育や、教師ができる事は、すべての生徒に、興味がもてるような環境（教材・資料・学習活動・真心etc）作りを、いかに工夫してゆくかということなのではないだろうか。そして、自らの思いや感覚を表現することに喜びをおぼえるような、創造活動が必要なのではないだろうか……。

生徒たちとの学び合いの毎日、まだ2年しか経っていない私は、すべて手探りで、不安になりながらもただ表現することの喜びを味わわせたい一心でやってきました。ですから、この第47回全道造形教育研究大会、根室大会には、出席する前から楽しみにしていました。

何しろ、造形教育に携わる諸先輩たちの授業がみられるわけですから……。「感性から発し 躍動する力を育む造形教育を！」この研究主題からは、情報化社会で直接的な経験をするのが少なくなった子供たちに、みずみずしく、豊かで素直な感受性を、直接的で、身近な造形教育で磨こう！と呼びかけられているようで、関心が深まりました。

中標津町の館山先生の「鮭の皮を使って」からは、ふるさとの身近な題材を、生徒自らの手で構想してゆくという点だけでなく、先生の教材研究への熱意が感じられとても勉強になりました。根室市の長谷川先生の「石に描く」からは、本当に身近なものを、見つめ直し、発想してゆく題材のおもしろさと、授業中の生徒たちの素直で楽しげな様子が非常に印象的でした。また、提言綴からは、児童たちの創作意欲を喚起する様な熱心な小学校での取り組みから、たくさんの教科に携わっているのに図工の分野でこんなに研究され、創造することに喜びを持てる子供を育み、中学校に送り出してくれているんだと考えると、その熱意を無駄にしないような努力をしてゆきたいと思いました。

来年も参加して、自分の勉強にしてゆきたいです。



「郷土を見つめる心」

釧路市立鳥取西中学校 北山 貴子

長谷川先生の研究授業は、私も実践してみたいと考えていた「石に描く」だった。身近かな素材といっても改めて自然の素材を手にして、おもしろいとか美しいと感じる暇や心の余裕を失っている現代の生活。必要な物はほとんどそろっており、また容易に手に入る。そんな生活の中で、何か大切なことを忘れかけてきているように思われる。「たかが石」も、普段とは違う角度から見つめたときに創造の扉は開かれる。ひとつひとつ違う石の色・形・質を見つめていくと語りかけてくる何かがあることに気づく。今まで感じることのなかった思いが湧き、ひとりひとりの全く違った感性が浮かび上がる。そしてそれを表すことによって「ただの石」は“宝物の石”に変わる。身近かな素材を見つめ、そして感じることは実はとても重要な意味を持っているように思う。

授業は5～6人で構成された5つのグループが、四角い木枠の中に、それぞれがイメージして描いた石や木の枝や葉などをグループのテーマに合うように彩色した板に配置したり、描き加えたりしている段階のところであった。グループ学習はとかく発言力のある子ども中心になりがちだが、それぞれが屈託のない意見を述べながら制作しており、普段の学校生活のチームワークの良さや楽しさが自然と伝わってきた。ひとりひとりの良さが重なり合ってより良い物が生まれる雰囲気をつくるのが大切なポイントになることを改めて感じた。

館山先生の「鮭の皮を使って」の授業も大変興味深く、教室に入ったとたんに感じる鮭の匂いが印象的であった。素材の加工を考えると大変な苦労があったに違いない。しかし授業を受けた生徒たちは、思い思いに素材を生かそうと熱心に制作しており、郷土の素材への関心をしっかり高めたように思う。

根室大会では、現代生活の中で忘れがちな「郷土を愛する心」を育てる大切さを学んだ。

分科会点描 (第6分科会から)

- ◎テーマが生徒にとって興味のあるものだと感じた。
- ・今回は、各班ごと事前に資料を集めてイメージを作っていた。
- ◎他の題材も含めて普段の授業で時間に追われるということはないか。
- ・この題材では、作業の流れの中でどんどん発想が広がって作品が増えていくので、時間内にはなかなか終了しない。
- ◎最谷川先生の雰囲気柔らかく生徒を乗せるのが巧妙に感じた。見ているものも発想がかき立てられた。授業の中にいくつもの要素が感じられた。
- 1 ポップアート…… いずれ、ひとりひとりの箱につなが

- てもいいのではないか。
- 2 (個々のイメージを集団のサブテーマに乗せて) 集団を意欲喚起させる。
- 3 イメージを話し合う…… (班の協調の過程は?) 多数決や妥協ではなく個々のアイデアが蓄積し、より良いものを作り上げるものだとすることを考慮する。
- ・班ごとの完全な統一は強制していない。迷いや、回り道はあったが、特定の意見に引かれる事もない。個々のやりたことを収拾した状態。お互いが褒め、認めていた。
- ◎クラス内の人間関係に大きくつながっている。自己評価に相互評価を加えては。



第8分科会提言より わたしの美術教育実践

「今、望まれる高校の美術教育について」

北海道札幌丘珠高等学校

本田 勝 哉

本年度の美術選択者数は、1年3クラス118名、2年4クラス159名（1クラスのみ美術クラス）で、美術Ⅰ・美術Ⅱ計週14単位を実施している。

美術はもともと楽しく、だが難しいものだ！

4月のオリエンテーションでは、小中学校での図画工作・美術との違いを時間をかけ、たっぷり話すことから始める。例えば、絵を描く行為は誰からも教わることなく、ある日突然、ペンや鉛筆を持った時から始まる《本能》なのである。とか、その《本能》的なものが、年をとるに従い、〇〇ちゃんは絵が上手！といった評価をされることにより、不得意である苦手であるといった思い込みにゆがめられることの話。また、もともと自己表現活動なのだから、ありのままの気持ちで描けば良いのに、テクニックばかりで満足したり、青年期の思考の深まりなども無しに美術を軽んじている風潮がある。……美術は自分で答えを見つけだす科目である。そして、心を育てる科目であると2年間にわたって言い続けるのである。

1年は絵画・デザインの基礎固め！

2年間のたった120時間の中で彫刻や工芸分野もやってみたいのだが、実際はスペースや設備の関係で、絵画とデザインの方に絞って授業を組み立てている。当然、生徒の興味が持続しない危険性もあるが、前回の課題が次の課題に生かされるように配慮し、最終的に2年の後半での製作においてより自己の表現が明確に出るように、それを目標において1年での授業を考えている。

例えば絵画では、絵を描くためにはよく見ることが大切と基本に返り、しわしわにした新聞紙を、ボールペンで描かせている。その製作前には、鉛筆の持ち方や線の重ね方を学習し、明暗・質感といった諸要素についても触れている。更にボールペンで完成させた後には、透明水彩により着色させる。自分でも一枚の作品に色々なものをぶち込んでいるものだと思うが、生徒にとっても、大変ながらも充実した手ごたえが得られる作品になるらしい。そして、一年時における作品は全員分を廊下に展示することにしていく。教師の一方的な批評よりは、一目瞭然であり相互に鑑賞しあう利点がある。

美術Ⅱは製作意欲を高めるために

2年では新しい表現素材として、油彩を取り入れている。用具の扱いの面倒なこともあり、教える側はあまり好んでいない。しかし、油彩が出来るということで興味を抱き、美術を選んでくる生徒もいる。今までとは違うタッチの工夫や、重ね合った色の深みに表現の楽しさを感じる生徒も多い。アクリル絵の具なども売られているのだが、やっぱりではありながらも油絵具の味が捨て難く、油まみれになりながらも続けているのである。

完成された油彩画には、ブームになっているトールペインティングをまねて、手づくりの額をつくらせ、返却して

いる。これは、予想以上に評判がよく、返却後、自室に飾っているなど、役立ったものになったようである。

メッセージ・イラストレーション

2年後半は、今までやってきたデザイン・絵画の両分野の集大成として位置づけている。2年後半にもなると進路意識が目覚めはじめ、精神発達面においても広く社会に関心をもちはじめ、大人としての自覚も必要とされる。美術の授業では、それまではどちらかと言えば、自己満足的なものとしての作品が多かったのだが、ここに来て、人に何かを伝える事を目的として一歩進んだものに挑戦しようというのがねらいである。

イラストレーションというと、かなりあいまいで軽く適当なものに思われやすい（落書き・お絵描き程度の）ものを、いろいろアイデアや助言を与えながら、メッセージが込められているものまで高めていくには難しいものがある。導入部分では、自然環境関連のビデオを見せたり、『自然・地球・人間』というテーマを基に新聞記事を集めさせ、その感想をまとめさせてもいる。…この教材を機に生徒がどう変わっていくかも楽しみである。

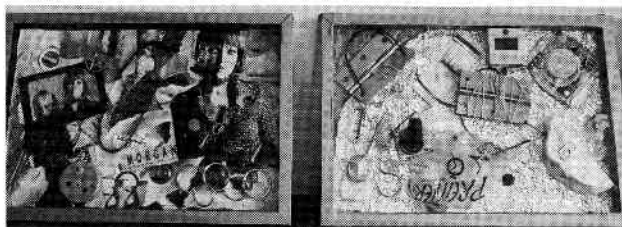
油彩・イメージ「私（I・愛）について」

2年間の最後の作品となるものは、一切の制約をなくし、自由画をかかせている。ただし、油彩によるものだから、デザインと違って油彩の良さが強調されるものを。また、あくまでも共通したテーマがあるので、イラストと同様に自分の今の気持ちなりを伝えられるものを。という助言は考えている。実際、自由であることが最も難しいことであることに生徒たちは気づく。そして、自分が2年間、どう美術と接してきたかが自分で評価できるものにもなるようだ。

最終的には《自己を表現する》という美術の原点に戻り、終わらせたいと思っている。

1つの作品ができあがるまでには、自分でしか体験することのできない、悩みや苦しみ、そしてそれらを時間とともに自分でまた解決し高めていくのが、美術教育であると確信しています。美術は心の成長に大きくかわる科目であることは間違いありません。美術教師としてもテクニックや上手い作品を作らせるだけでなく、生徒の生き方に直接かかわっていきけるような、真摯な教育をめざしていくべきだと思います。

今の時代だからこそ、美術を始とする芸術教育がもっと大切にされるべきだと思います。



造形教育の根っこの太さを感じ、未来に萌える新芽を感じた根室そして留萌

北海道造形教育連盟 研究部長 菅 原 清 貴
(札幌市立三角山小学校)

■根室の街の入口に取り付けられた横断幕にその心意気を強く感じて大会に参加させていただきました。

根室大会の価値を考えるための『物差し』として、道造連研究部の掲げている4つの具体課題を通して振り返ります。

課題1…子供主体の授業へ一層の転換を！

子供の思い・願いを大切に材料や対象に対して、誠実に五感を通して働きかける力を培い、造形活動を楽しませたい。この活動は、自分のよさや可能性を進んで生かす学習活動でもあります。この子供主体の授業スタイルにさらに一步でも近づく、授業活動になっていたかの課題です。小学校から高等学校までどの授業も、旺盛な子供たちの試行錯誤に満ちた意欲的なものであったと思います。特にトレーシングペーパーやビデオカメラを使用した新たな取り組み、鮭の皮や石を材料に積極的に根室の自然を生かす試みは地域発信の個性的表現を予感させる次世紀に繋がる貴重な提案であったと思います。

また、北海道の多くをしめる少人数の学校で、子供達の心をつなげ温かな人間関係を育むために、造形活動は見事な役割を果たしていることを2つの複式授業は示してくれました。

どの授業も、前に向かって進む授業であり且、これまでの造形教育の蓄積されてきた財産を土台とした優れた実践であったと感じました。

課題2…造形教育ネットワークの一層の飛躍を！

- ・全道研究主題を全支部の英知でつくりあげよう。
- ・教育美術展に審査員の派遣を。

この新たな2つの提案をしました。これは、ネットワークをさらに強い絆でつなぐようにと願ってのことです。根室では、土台となる『根っこ論議』をネットワーク会議でスタートさせました。今、造形教育に求められている根源的な課題を把握するために、現代社会の分析から始めました。ちょっと論議して「わかった」という問題でないだけに大変難しいのですが、そのような広い視野に立って明日の造形教育の授業を指向してみる ことが重要だと思います。

この論議の中で浮かび上がってきた言葉に『幸せ感の転換』がありました。心の教育が叫ばれている昨今、教育美術としての価値が一層問われています。

課題3…学校種の壁を越えて

一人の子が、幼児期から青年期まで学校という場で自らを高め豊かな資質を身に付けていくわけですが、我々はどこまで幼稚園から高等学校や大学の教育を認識しているのでしょうか。忙しさにかまけ井の中のカワズになっているのではないのでしょうか。もっと、子供の育つ環境に関心を持つ意味からも、積極的に学校種の壁を越えて授業参観を手始めに各地域の実情にあった取組みを期待します。根室大会では、この点にも配慮していただき、幼稚園から高等学校までの授業を公開していただき感謝します。

課題4…北海道造形教育のアイデンティティー確立を

3つの海の匂いを感じる造形活動を…根室の宿は、三洋館という宿屋でした。日本海と太平洋そしてオホーツクの海に囲まれた我が北海道。それぞれの海の風を受けて育つ子供の活動が個性的で生き生きしたものになると自と違った光を放つようになるのではないのでしょうか。『三洋感』が作品や活動に感じられてくることが望まれます。勿論、海の無い内陸の地域からも北海道の広く伸びやかな自然を反映した授業も期待しています。

ね…熱中する題材と場を む…夢中になる夢の世界を
る…論理的に構築する造形教育が一層大切です。

■留萌はすでに萌えています！

去る9月12日に『造形教育研究大会・留萌大会プレ大会』が留萌市立の緑丘小学校と留萌中学を会場に盛大に開催されました。大会開催の中心学校の緑丘小学校の玄関や体育館には、本番さながらの大きな看板が掲げられ雰囲気はすでに大会当日を思わせるものでした。

朝一番に繰り広げられた留萌中学1年生の授業は様々な技法を駆使して自らのイメージを広げようとする、ひたむきに感動しました。体育館の半分を会場にした小学校1年の造形遊びは、居島先生の優しさが子供達のしっとりとした動きに表れ、つくことを楽しむ原点を感じました。オープンスペースを利用した、かもめ幼稚園年長組の子供たちは、夢を形にできる嬉しさに、先生が苦心された場のなかで自由に飛び回っていました。すでに、大会主題の悠・遊・優を実現しつつあると池田研究部長のお話を聞きながら感じました。来年留萌で造形教育の芽が一層伸びる『萌える留萌』がありました。

根室大会の集録を発刊するにあたって

第47回全道造形教育研究大会・根室大会

実行委員長 鍋谷 尊之

平成9年7月28日・29日の二日間、日本最東端の根室市で行われた第47回全道造形教育研究大会根室大会には、夏休み中にもかかわらず全道各地からご出席下さいまして、誠にありがとうございました。

今大会実行委員会の中核として、根室造形教育連盟にとりましては初めての全道大会だけに、〔小・中・高校の造形教育に関する実践交流の場にする〕〔郷土素材を発掘し、教材化すること〕の二点を重視し、研究主題を〔感性から発し、躍動する力を育む造形活動を！〕としました。

自校研と違って人・物・場所・金とすべてが寄り合わせの研究大会だけに、準備に大きな疲労が伴いましたが、引き受けたからには根室らしさの出せる内容にしようと、根室の素材を見詰め直すところから取り組みました。

鮭の皮の活用、石や流木の活用、粘土の素焼きなど郷土の素材を発掘し、教材化出来たことと、新任間もない教員が意欲的に参画し、鋭意努力してくれたことが大きな成果となりました。

皆様には充分満足のいただける根室大会ではなかったのではないかと多々反省をしておりましたが、皆様の適切で心温かい励ましの言葉を受けて「やってよかった」という実感が込み上げてきたところです。

また、社会の変容に伴い、学校教育に「豊かな心の育成」が強く求められている時だけに、人間性豊かな感性を培う図工美術教育の重要性が再認識された研究大会でもありました。

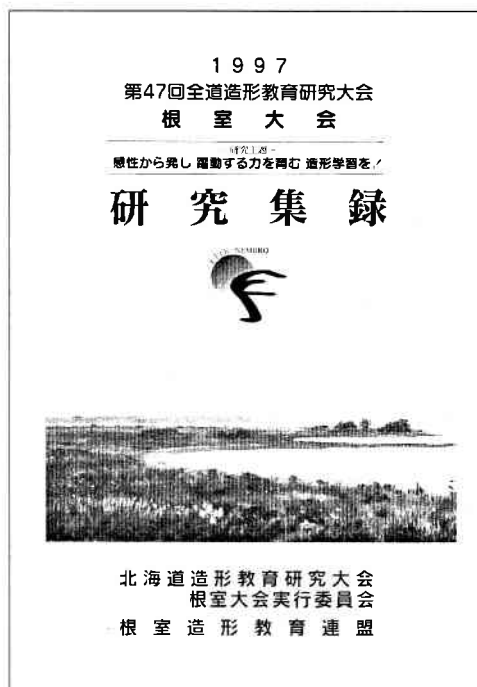


最後になりましたが、〔二年間もかけてオホーツク海岸を散策し流木を拾い集めて下さった清水克美先生〕〔根室に生育する植物の形態や特徴をとともわかりやすく講演して下さいました栗野武夫先生〕には心からお礼を申し上げます。

更には、本研究大会を成功させるべくご尽力下さいました北海道造形教育連盟本部の吉田優雄委員長をはじめ、北海道教育庁根室教育局、管内各市町教育委員会、協賛各社、会場を提供下さった根室市立花咲小学校及び根室市総合文化会館の職員の皆様方、本研究大会をいろいろな形で支えて下さった多くの方々に心からお礼を申し上げます。

ご指導、ご支援、ご協力、誠にありがとうございました。

根室における図工美術教育実践の足跡を記したこの研究集録が、今後少しでも皆様のお役に立てるのなら、こんな嬉しいことはありません。〈大会集録序文より〉



あ と が き

天然のクーラーのなかで互いに学び合った根室大会の清々しさがいつまでも余韻として残っています。温かな教師の中で大きく育つこどものすばらしさ、自然の中から学ぶこと、創り出すことのすばらしさをたくさん教えていただきました。根室の「感性」が留萌の「悠・遊・優」へ受け継がれて、また輪が広がります。次号には留萌のプレ大会のようすも掲載する予定です。豊かな20世紀をつくるのはあと2年です。どうぞよい年をお迎えください。

安木 尚博(幌南小) 益村 豊(山鼻南小) 土肥 宏充(厚別北小) 小泉 誠(開成小) 中山 龍男(手稲西中) 毛馬内 國夫(桑園小)